

イル＝ハン朝行政文書システムにおけるモンゴル文書様式と元朝印章制度の影響 ——アルダビール文書を中心に——

(要 旨)

四日市康博（九州大学・専門研究員）

イル＝ハン朝の公文書の中には漢字銘を持つ方形朱印が押印されたものがいくつか現存する。イル＝ハン朝にはペルシア語・アラビア語のほか、トルコ語・モンゴル語の文書も存在し、それらの言語が複合した文書も見られるが、漢字漢語により文章が書かれた文書は管見の限り現存せず、漢字の使用は印章にしか見られない。このような方形朱印は、その形状、大きさ、銘文の内容などから判断して、明らかに元朝の印章と同類のものか、或いはその影響を強く受けたものである。これらの朱印はペルシア語史料では *āl-tamghā* と呼ばれ、その押印がなされた文書もまた *āl-tamghā*（朱印文書）と呼ばれ、官文書のなかでも重要な文書と見なされた。

イル＝ハン朝の公文書がモンゴル帝国期様式の公文書とある程度の共通性を有していることは既に周知のとおりであるが、漢字朱印の使用もまた、モンゴル帝国・元朝の文書行政システムの影響の一環であると言えることができる。イル＝ハン朝の朱印には、「～之寶」という銘文を持つ皇帝印（正確には印ではなく璽であるが、本発表では印と称する。以下同）と「～之印」という銘文を持つ官印の二類が存在するが、皇帝印と王印・官印における「璽」と「印」の区別は明らかに中国の印章制度を踏襲したものであり、元朝の印章制度に基づいたものであった可能性が高い。実際、管見の限りでは、御璽の漢字朱印が押印されているのは全てイル＝ハン朝発給のモンゴル語 *üge* 文書ばかりであり、官印の漢字朱印が押印されているのは全てワズィールやアミール発給のトルコ・ペルシア語 *söz* 文書ばかりである。

イル＝ハン朝の漢字印と元朝印章制度の関係は、その使用言語にも反映されている。モンゴル帝国期の印章としては、グユク期の皇帝印としてモンゴル語印の印影が残っているものの、ウゲデイ皇后トレゲネの皇帝印やウゲデイ裔の皇子の皇太子印などはいずれも漢字印の印影が残っている。元朝に入るとより多くの皇帝印・王印・官印が使用されるようになり、モンゴル語・トルコ語・漢語・チベット語に対応する文字としてパクパ字が採用されたが、元朝の官印制度にもパクパ字が採用され、多くの官印がパクパ字で作成された。ただし、現在のところ、パクパ字の皇帝印は確認されておらず、現存する皇帝印はいずれも漢字印ばかりである。イル＝ハン朝の漢字印も、現存する皇帝印はやはり全て漢字印である。一方、方形朱印の印影を持つイル＝ハン朝官印はその大半が漢字印とアラビア文字印であり、パクパ字官印はわずかに一例を見るのみである。

実際にイル＝ハン朝の漢字印を見てみると、「行戸部尚書印」や「王府之印」など元朝でも使用されたと見られる官印のほか、「右樞密使之印」や「総管隠院之印」など元朝では存在が確認できない官職印や官衙印も見られる。一方、皇帝印に関しては、「輔國安民之寶」「王府定國理民之寶」という御璽として成立し得ない銘文や「眞命皇帝天順萬事之寶」といった皇帝印としてはやや不自然な銘文を持つこと、さらには建前上は元朝の皇帝・皇后・皇太后・皇太子以外は御璽の使用が許されなかったことから、いずれも元朝の規定した御璽を基にしてイル＝ハン朝側で独自に製作された皇帝印であったと考えられる。ただし、これらの皇帝印の原型となったものとして、おそらくフレグ＝ハンが世祖フビライ＝ハーンから授与された御璽が存在したことが想定され、それはチャガダイ＝ハンがウゲデイ＝ハーンから授与されたとされる「皇弟之寶」と同様のものではなかったのではないかとと思われる。